

研究ノート

古代思想は何処へ行ったのか

山川淳生 博士課程前期2年

1. アシアーとエウローペー

東と西の交流というのは文化・歴史にとって大きな問題である。

ユーラシア大陸はその言葉のなかにユーロとアジア（アジア）を含む。東のアジア、西のユーロである。アジア・ユーロの古典ギリシア語で言う場合のアシアー（Ἀσία）、エウローペー（Εὐρώπη）、その語源は古代フェニキア言葉にまで遡れる。そこでは主に現代の意味に近い、日の出と日没に関連させた「東」と「西」の意味を持っていたという。それらはギリシア・ローマの文化の時代はトルコの東あたりの一定の地域を指す言葉となり、その言葉に関連させられた（あるいはそれより古い）ギリシア神話における名前が現代まで引き継がれる。

現在、アジアと言えは、どのような領域を指すだろうか。まず東アジア、東南アジア、中央アジア、西アジア、に分かれる。中央アジアと西アジアはとても大雑把に言う時には同一視される。とりあえずユーラシアの東はほぼアジアである。ユーラシアの西にヨーロッパとアフリカとアジアの境がある。ヨーロッパとアジアの境は何であろうか。トルコはヨーロッパだろうか、アジアだろうか。トルコの西、現在のイズミル、古代のエペソス（エフェソス）は古代ギリシアの都市である。トルコの古い都市はいわゆるギリシア哲学と言われるカテゴリーの哲学者、新約聖書絡みの様々な要素と「西洋の源流」と言われるものが多く存在し、その重要な役割を持っている。トルコは東だろうか？西だろうか？

またロシアは世界で最も大きな国で、東西に長い領土を持つ。ロシア連邦の「極東連邦管区」に属する、シベリア鉄道のはじまりの街、ウラジオストクは日本のすぐそこである。ロシアはスラブ文化の他に、アルタイなどの、いわゆる「中央アジア」的な遊牧民族の文化の領域も存在する。ロシアは東だろうか？西だろうか？

エジプトは東だろうか？西だろうか？国際連合の分類ではエジプトはアジアではない。（ちなみにその分類では先ほどのトルコは「ヨーロッパに

分類され得るアジア」というカテゴリであり、ロシアはウラル連邦管区、シベリア連邦管区、極東連邦管区が「北アジア」に分類される。)しかし、エジプトにはアレクサンドリアという(古代の)街がある。名前にあるようにアレクサンドロスの街である。それは、(ギリシア文化を西とみなすならば)西の者が建てた「東の叡智」が集まる場所でもあったといえる。

国境というものはえてして暫定的なものである。現在の世界地図を眺めた時に見受けられる「国境」は「歴史」と必ずしも一致しない。それは歴史のどの時点においてもそうあり得る話である。要は、「文化圏」というものに国境が必ずしも一致はしない。例えば、かつて「ギリシア文化圏」であった場所は必ずしも現在の「ギリシア」という国の国境には一致しないのである。

2. インドのギリシア人

常識的には、インドという国は現在「東洋」に属すると言える。しかしながら厳密に区別される際は日本や中国などの「東アジア」とは別になる。

言語的には「インド=ヨーロッパ語族」という名がある通り西洋と同祖である。インドという国の歴史・思想はユーラシアの東西を考える上でとても重要な国であるといえる。

インドと言えば、思想文化的には、ヒンドゥー教、仏教、及び聖なるガンジス川(に流れゆく死体)、全ては土に還る故にどんなものも汚れたもの埋めておけば良いとでも言いたげな論理から生じたのかもしれない不衛生さ、あるいはカースト制度等が思い浮かぶだろうか。仏教は言うなれば今や「東洋の代表的な宗教」というイメージがある。それはインドというユーラシアの中央に位置する場所から主に東方に広まったからという理由もあるのだろう。ただし、そのおおもとであるインドでは仏教はほとんど勢力を失っている。

その東へ広まった仏教もやはり国々によって様々な特色がある。宗教とはそういうものなのかもしれないが、その土地ごとの思想や後にその土地

にやって来た思想と融合したり、それらの既に在る思想にあわせて元来のモノからある一定のものだけ教義を強調したりするのである。

今回の研究ノートの主題は、或る「東の思想」と「西の思想」の交流についてである。まずはインドとギリシアという東西に焦点が当たる。インドとギリシアというふたつの領域が、お互いに何らかの影響を与え合ったという事である。それは前述の「仏教」にもあらわれる。「ギリシア思想」と「仏教」とはひとめでは全く関わりなどないように思えるが、それは恐らく現代あるいは世界史的な「東洋」「西洋」の境界線がそれを邪魔しているのである。

古代のインドとギリシアの交流の資料はそれほど多いものではないと思われるが、「ミリンダ王の問い (Milinda Pañha)」という仏典はその中でも有名なものである。ミリンダ王というのは紀元前2世紀後半頃の「インド＝グreek朝」の王であるメナンドロス1世の事である。そのミリンダ王と仏教の僧ナーガセーナとの問答録であり、漢訳の名では東晋時代成立といわれる「那先比丘経 (なせんびくきょう)」という名で知られている。「ミリンダ王の問い」そのものは仏教の経典のひとつであり、ミリンダ王が仏教に改宗あるいは信仰を持つ過程がこの経典の内容となる。当然、経典自体は少々仏教寄りの立場中心の書物であるという側面はみられるかもしれない。

実際、現在の西インドからパキスタンにかけてギリシア人による、公用語としてギリシア語が話されていた王朝「インド・グreek王朝」が存在していたのは確かであるし、メナンドロス1世も実在の人物である。ただし、実際にこの経典通り何処まで深く仏教に帰依したかは謎の残るところである。ただインドでのギリシア人たちが仏教を信仰する傾向はあった。なぜならばインドにおいてギリシア人は「異国人」であるがゆえに、インド土着の宗教であるバラモン教には入りこむ事が出来なかった。そのため「異国人」を基本的に（その宗教における救済原理的な意味も含めて）差別をしない仏教が受け入れられたのだ。

そもそもそのような古代インドのギリシア人たちは何処から来たのか。最もわかりやすいギリシア人のインドへの侵入はアレクサンドロス大王の東方遠征であろう。アレクサンドロス大王は小アジア、エジプト、ペルシアと続きインドのパンジャブ地方まで遠征を行った。領土は丁度今のパキスタンとインドの国境周辺までと言える。その広大なマケドニア王国の領域自体はすぐに後継者達によって（ディアドコイ戦争）分断されることになる。その影響でインドの北西にはギリシア人が移住した。しかしながらインド・グreek王朝の時代になるまではギリシア人の勢力は弱いままであったようだ。インドにおけるギリシアの痕跡はフランスの人類学者クロード・レヴィ＝ストロースの著書「悲しき熱帯」のなかの第9部「帰帰」、タクシーラの章にもその記述はある。タクシーラ、あるいは一般的にタキシラと呼ばれるこの街は、インドの北西部とパキスタンとの境にあり、インドより西の国とインドとの交流において重要な街である。

また他にそれに関連したギリシアとインドの関係性としては、ガンダーラ美術も挙げられるであろう。インド・グreek王朝は紀元前10年程に勢力を失い、ギリシア人によるインドの一部の支配は終わりを告げるが、その後、ギリシア人の文化はガンダーラに大きな影響を与える。ガンダーラ美術の起こった時期は紀元前50年から紀元後75年あたりとされる。ガンダーラ美術の特色は何よりも人体を彫像する事にある。これはギリシア彫刻の影響である。日本の仏教になじみが深いと、仏教に仏像がつきものであることは当たり前のように思えるかもしれないが、実際「諸行無常」はある種の固体ではなく「実体」を求めるというウパニシャッド的な「アートマン」と「ブラフマン」の思想¹⁾を精神的に一部引き継ぐ仏教には偶像崇拜は確かにそぐわないものである。程度にもよるが、そのような仏教に現代まで続く「仏像」の存在を与えたのはある意味ギリシア彫刻だという考え方もある。

このガンダーラは大乗仏教の隆盛にも大きな役割を持っている。個人の修行を重視する小乗仏教に対して「大衆救済的」「菩薩的」な要素を重視

する大乘仏教のなかにガンダーラ美術、あるいはその先のギリシアの姿が見てとれないこともない。また仏教の「唯識論」のひとつの大きな思想を打ち立てた仏教僧である世親（Vasubandhu, ヴァスバンドウ）²⁾ もまた、紀元後300-400頃の人であるため時代は後ろのほうになるが、このガンダーラ文化圏の人であると言えよう。

1世紀から3世紀頃の北西インドの領域の王朝であるクシャーナ王朝とギリシアの交流や、ギリシアの大きな学問体系のひとつであった占星術が、占術・あるいは古代的思想≒異端的思想を否定するローマ以降のキリスト教に禁止されてヨーロッパから姿を消していても、ギリシアからインドに入った占星術が打ち滅ぼされる事なく長く続き、今でもその伝統が一部続いているという事など、実はギリシアとインドの関連は恐らく常識的に思われているよりも豊富で、少し紐解いてみるだけでも次から次へと出て来るところがある。

3. ツアラトウストラは何と言ったか

仏教という側面からもギリシア～インドのつながりを見る事も出来るが、ギリシアの側面からもインドを見る事は出来る。また、このギリシア～インドという場所の間にはペルシアという文化圏が存在する。このペルシア、今のイランの文化圏もまた古代思想においては重要な役割を持っていると言える。

ギリシア哲学というカテゴリ³⁾においてギリシア哲学者と言われる人々のなかで、ピュタゴラス、ヘラクレイトス、プラトンなど「東方の知」を修めた者と呼ばれる人々が居る。彼らの哲学の源泉に東方が求められるのである。またルドルフ・シュタイナー及び一部の（少々異端的であるかもしれないが）歴史理論ではアレクサンドロスの東方遠征の目的に「東方の文化」つまり「東方の知」をその領土内に納める事があると考えられている。アレクサンドリアが「知の集まる場所」という役割を持っていた事か

らもそう考えられるだろう⁴⁾。

ピュタゴラス、ヘラクレイトスといった人々は紀元前600年－紀元前500年あたりの話になるため、先述のミリンダ王、アレクサンドロス、ガンダーラ文化と言ったギリシアの人々・要素からは200年程遡ることになる。

彼らの東方の知とは主にヘブライ・ペルシアの知であると言われる。ヘブライ思想と言えばユダヤ教、及び現代のキリスト教・ユダヤ教の在り方が先行しがちであるが、古代のヘブライ思想にはその全体像を掴む際に様々な問題がある。古代はある種の「魔術」の世界である。ローマ以降のキリスト教が忌み嫌う魔術・占術の世界である。それは旧約・新約聖書のなかに魔術・占術の禁止と思われる事が書かれているからである。しかしながら古代のこのような曖昧な文献は解釈の可能性が広く、同時に何度か各々に都合の良い解釈に沿って「書き換えられた」可能性も、文献における不可避の宿命ではあるが、存在する。その宿命はやはりその文献の影響力が大きい程に大きな問題になるのだろう。

古代のヘブライにはゲマトリアの伝統があった。それはある種の言語的な古代思想である。ヘブライ語のアルファベット（アレフベート）の数字に対応して、単語毎の数字的関連性を読み取る思想である。ラテン文字の I = 1, V = 5, X = 10 などでもそうであるが、古典ギリシア語など古代の言語においてはアルファベット自体が数字の役割を持っていた。その数字の和や組み合わせを探求するのがゲマトリアである。故にギリシア文化もゲマトリアの文化であった。

ピュタゴラスが数字にアルケーを見るのもそれに関連するのだろう。現代の数学者がアルケーは数学である、つまり万物は数学で構成され表されると考えるのとピュタゴラスの数のアルケーには少々違いがあると言える。

このように古代的魔術はヘブライの中に認められるとも解釈できる。魔術・占術の禁止はキリスト・ユダヤにおいても様々な場所で論議されてきた事なのだろう。「良い魔術」と「悪い魔術」と分けて悪い魔術を禁止す

るといふ程度の禁止もあれば、魔術の名のつくもの、発想させるものは全て悪魔であり地獄に落ちるので禁止するといふ程まで徹底して魔術を禁止するなど、魔術に関する考えも他のキリスト・ユダヤの象徴同様に様々であると思われる。

そもそも「悪い魔術」は「悪魔」らしさの確立の為にありもしない事を敵対勢力側から誇張された逸話だけが残った状態であったのかもしれないが。

あるいは例えばジャンヌ・ダルクを処刑する理由付けの為にジル・ド・レや彼女の「異端志向」をでっちあげるなどといった行為の際に用いられる便利な言葉・体系こそが「黒魔術」であったのかもしれない。事実、異端の黒魔術を行った者が実際どれほどそれに精通していたかは知る事はできない。魔女狩りのそれのように、元は個人的な「気に入らない相手」を排除する為のレトリックであったものが蓄積して極端化して「異端の悪魔」という思想がうまれたのかもしれない。

いずれにせよこのような「魔術」を知る者が、古典ギリシア語で言う「マゴス (μάγος)」である。日本でいう「魔術」という言葉自体キリスト教からの蔑称のようなものではあるのかもしれないが、前述の黒魔術と白魔術の区別は別としても、古代思想には哲学・自然科学的なその神秘主義があったと言える。マゴス、ラテン語のマグス (magus) の意味はキリスト教が数々の公会議を行う毎に変化していったと言っても良いだろう。古代のマゴスは、いわゆるキリスト教の仮想敵のような、現代的な想像の産物にすぎないのかもしれないサタニズムの黒魔術のような「魔術」が行われていたわけではない。その古代思想の全貌はギリシア、ペルシアの宗教理論、及び先ほどの「東方の知」を受け取ったギリシア哲学者たち、そして各地に伝わる「秘儀」の在り方から読み取る事ができる。

古代世界のもうひとつの柱であるペルシアが西の世界に干渉する事は少なくない。古代ペルシアという場所にキーワードを持つ宗教はミトラス信

仰とゾロアスター教であろう。ミトラス信仰はギリシアの世界観の形成に大きな役割を果たしていると思われる。またゾロアスター教は善悪二元論の論理で有名であるが、古代の様相としては、現在のキリスト教の「天使と悪魔」的な善悪二元論を人が想像するならば、古代より後の思想であるはずのそれとはまた様相が違い、ゾロアスターの善悪二元論は古代の思想の在り方を保っていると言える。

果たして古代思想というものはおおよそ「魂」と「宇宙」が織りなす相対的な世界観で、普遍を求めても結局主観に帰してしまう「善」と「悪」という考え方はより近代的な考え方なのだろう。「個別」は哲学のはじまり以降の発想のメインテーマである。善悪の区別には、自分以外の他人が必要なのだ。比較しなければ優劣・善悪は生まれないのだから。

ただこの「善悪二元論」にヘブライ思想が影響を受けた、あるいはその反対でゾロアスターがヘブライ思想に影響を受けた、という事は十分考えられる事だろう。言うなれば、今の人考える天使と悪魔による「善と悪の戦い」的な「善悪二元論」はその後歴史的には少しずつ西に渡っていったとも言える。少しずつ西に渡り、少しずつ今のような形になったのだ。

またペルシアと西洋のかかわりとして重要な、あるいは著名なのは新約聖書の「東方の三博士」である。彼らはペルシアのマゴスたち（マゴイ）だとも言われる。⁹⁾

4. アポロンの国々

さらに古代思想というものの柱となっていたのはギリシア、エジプト、ペルシア等各地における秘儀である。秘儀の中身は、秘儀という名の通りその内容は口外してはいけないものであった。しかしながらエペソ生まれのヘラクレイトスの断片からエペソスの秘儀を読み取ろうとする考えであるとか、あるいは他にもプラトンやアISKYロスらも秘儀の内容を口外してしまったという非難の話もいくつかあるようだ。いずれにせよ秘儀

の内容は、古代思想全体の持つ考え方の「傾向」のようなものとリンクしていたと考え得るだろう。

そしてその秘儀は、古代から続き現在も世界の民俗学的文化の中に残っている、あるいはアルタイの地域などで未だに現役である地域も存在するシャーマニズムの思想と密接に関わりを持っていたと考えられるのである。

ここで一度、シャーマニズムとは何かについて、少し触れておきたい。シャーマニズムは、死者の口寄せ、動物霊・精霊の憑依、及びそれを行うシャーマンといったキーワードで語られる。ミルチア・エリアーデはシャーマニズムの核心を「エクスタシー体験」に求めた。エクスタシー体験を伴うシャーマンのトランスとは、現代科学・生理学の文脈で言えば幻覚作用と呼ばれるものである。その作用を引き起こす為の様々な道具・人が摂取する飲料等・音楽・空間等がシャーマンの「秘儀参入の儀式」なのである。

そのシャーマニズムの存在する範囲は思ったよりも広く、シャーマニズムと関連して語られるべき事柄は今思われているよりもずっと広いはずなのである。ロシアの東半分には、今でもシャーマンの伝統が生きている場所も多い。日本では東北のイタコや琉球のユタなどがシャーマンとして有名である。これらの「巫女」が統治する世界観は、古代ならば日本や中国でもおなじみである。ユーラシアから太平洋へ向かって行く東南の国と島々、語族で言えばオーストロネシア語族の範囲の地域も巫女的文化である。そして南北アメリカ地域。更には北欧及びギリシア・ペルシアにかけての古代思想がシャーマニズムの土台から生まれた、あるいは強い密接関係にあるのではないかということも指摘したい。そうなればもう世界のほとんどの地域で見られる現象なのだ。

その中でも特に、南アメリカ、及びインディアンの文化の地域には極めて具体的、かつ分かりやすい「陶酔感覚」の文化が存在していると言えよ

う。この（その地域において）大衆的な現在進行形のシャーマンの文化は、現代においてシャーマニズムそのものを理解するあるいは想像する上で非常に参考になると思われる。

飲酒、喫煙、大麻などの現代で言うドラッグに分類されると思われる幻覚作用のある植物の摂取を行い、単調なリズムの音楽を演奏する（というよりも打楽器的文化なので叩く）。その幻覚的文化を持っている。シャーマン、巫女のような宗教的世界観は必ずしも存在せず、魂の遍歴や霊的体系があるわけではないが、エリアーデの言う「エクスタシー体験」がシャーマニズムの根幹であるならば、十分にそれと共通の要素を持っていると言えるのである。レゲエなどのいわゆる南アメリカ文化圏発祥の音楽が単調なリズムの繰り返しを元にしてつくられているのも、このシャーマンの体験の文化が基礎である事と無関係ではないかもしれない⁶⁾。

ギリシアの秘儀にはそれらのシャーマンの様相は十分に見受けられる。ディオニュソス信徒のマイナデスなどはまさにシャーマンの陶醉体験であろう。また（ディオニュソスの対立物として語られがちではあるが）アポロンにはよりシャーマンの痕跡が見受けられる。

オウィディウスの「変身物語」には、パエトンが（文中で語られている上では）父アポロンのもとへ行く際の叙述として、エチオピアから「東の日出ずる国」インドへと赴く叙述がある⁷⁾。太陽の日の出との連想によりアポロンが「東の国」に居るという考えがつけられたのかもしれないが、同時にアポロンと東方との関連が考えられる話は他にもいくつかある。

ソクラテスの逸話で有名なデルポイの神託所は、予言の神であるアポロンを祀った神殿として知られている。このギリシア神話の神アポロンの性格には、いくつかの段階があり、当初のアポロンの性格から様々な要素が時代毎に加えられて行った。はじめにアポロンは主に植物を司る神であった。そこに後に予言という要素が加えられた。デルポイの神託所をアポロンが所有するようになる神話もそれと同じであろう。そして更にその後、今人々が「アポロン」と理解する塑像された青年像のイメージが生まれたと思われる。

ここでアポロンに予言という性格が付け加えられたそれ自体にシャーマニズムの痕跡が認められるとも言えよう。ギリシアの神託所における各々のキーワードもそろっている。シビュッラ(σιβυλλα 巫女)の存在、そのシビュッラの言葉の特性、神殿内で焚かれる炎、それらの陶酔・狂乱的な要素がシャーマニズム的な様相を伺わせる。ことに、「火」というキーワードには他の古代思想的な様相も見取れる。ゾロアスター及びその周辺の(土着的な)宗教の「拝火教」、ヘラクレイトスの「火」などである。

アポロンが前述のように太陽の出ずる「東方の国」を司るという考え方の他に、もう一つギリシアの「北の国」から山を越えてやってきたという考え方も存在している。世界地図でギリシアの北を想像して貰えば良い。何も考えずにまっすぐ進めば、現在のスカンディナヴィアの入り口やフィンランド、ロシアの入り口にぶつかる。そこからアポロンは「山を越えて」やってきた。そして或る一定の時期アポロンはギリシアから北のその場所へ移動するというのだ。「太陽神」が東方の暑いインドに居るのは納得できるが、寒い北の国に居るのは納得しづらいかもしれない。ただ、その北欧の太陽が沈まない「白夜」やバルト海沿岸でよくとれると言われる琥珀など確かに太陽の存在感がありアポロンを連想させるものがある。

ロシアの中央と言え今でも現役でシャーマニズムが生きている場所である。また北欧・ゲルマンにもシャーマニズム的要素は見取れると言えよう。巫女の予言、オーディン(ヴォーダン)の秘儀参入、世界樹、魂の遍歴、獣の皮を着て獣の靈魂を宿す戦士ベルセルクル、と北欧神話はまさにシャーマンの物語である。ルーン文字の秘密を知る為、オーディンが世界樹ユグドラジルに体をグングニルに貫かれながら九夜自らの体を吊るした話など、その神話の過程はシャーマンの秘儀参入の過程の象徴として語られたのだとも解釈できる。

北欧神話と同様にゲルマン的な古い文化の側面を持つグリム童話のなかにも、世界の様々な神話的題材と共通する題材(洪水伝説等)、及び予言により登場人物の助けをする賢いおばあさん(Weisen Frau)などの存在が見受けられる。ギリシアからインドにかけての古代思想の思想地図のなかに、北方の世界まで範囲が及ぶシャーマニズムの領域も認められるのである。

5. そして彼らは何処へ行ったのか

古代思想のひとつまよりは、その後何処へ行ったのか。それらは多くがその後勢力を持ったキリスト教にとって「異端」であった。何よりキリスト教世界というものはローマが生きているうちは東西に大教会を持ち、ギリシア世界とアレクサンドリアを持つ東ローマの世界においてはそのような思想たちは紀元後少しずつ迫害されて行き、キリスト教徒によるヒュパティアの虐殺に象徴されるように、やがて根絶やしにされるべき「悪魔」に認定された。プラトンやアリストテレスは方法論だけが残ったと言えるのかもしれない。

ではこの神秘主義思想という異端思想たちはその後何処へ行ったのか。ヘレニズム文化はアレクサンドリアのキリスト教徒によるアレクサンドリア大図書館やムセイオンの破壊、虐殺などにより多くが焼かれ、殺され、失われた。そのような事は、各地域でもあったのかもしれない。この迫害を逃れる事ができた神秘主義思想は東へ行った。紀元後4世紀から6世紀、西からやってきた古代思想を引き継ぐ学者たちとその文献を隣のササン朝ペルシアが受け入れた。ササン朝はゾロアスター教を国教としていた王朝であったが、その宮廷の図書館にはゾロアスターの教典だけでなくギリシア・インドを含む各地の思想の文献があったと言われる。その後ササン朝ペルシアは651年にイスラーム王朝によって滅ぼされる。イスラーム世界においてもそれらの古代思想がキリスト教世界ほど迫害されることはなかったようである。

そのように神秘主義の伝統は一部イスラームでも生き続けた。そしてやがてヨーロッパにおいてルネサンスと呼ばれる時期には、ヨーロッパでは既に失われ、アラビア（及び東ローマのなかで秘密裏に）で保存されていたこの異端の思想が再び一部戻ってくることになった。というよりもそもそもそれ自体が古典復興＝ルネサンスという時代の契機であったはずなのである。

しかしながらその神秘主義の文脈に関しては「認めるか」「認めないか」

の議論は多く行われた。結局のところ、古代の神秘主義そのものがキリスト教的思想を覆す程認められる事は無かったと言える。実際現在でもルネサンスをその「古代神秘主義復興」の文脈から語られる事は少ない。しかしマルシリオ・フィチーノなど、古代的思想の文脈で探求を続けたルネサンス期の学者も確実に存在している。

18世紀末から19世紀にかけてのロマン主義というのもある種の古典主義復興である。古代神秘主義というものがこの時代に現存の社会へのある種の反発として用いられたというのも興味深い。古代神秘主義を異端視した頃から続く、古代神秘主義をまさに真実の真逆の存在、大きな悪魔と考える世界観のひとつの極にあったのかもしれない。ロマン主義の終わりの時代に位置する思想家ルドルフ・シュタイナーを、シュタイナー研究で知られる高橋巖氏は「ヘレニズム思想」を継承した思想家とも述べている。シャーマニズム、占星術、神話、古代哲学、それらを古代世界の思想体系のひとつの傾向を持つものとするならば、古代世界の神秘学の存在は、それ自体が支配的であった時代の後迫害され（今でも一部のキリスト教徒等にとってそれは悪魔であり続けていると思われるが）、現れたり消えたりを繰り返しつつも、幾つかの文化の源としてその存在は現代にも（神秘、つまりオカルティズムのその語源が示す如く裏に「隠れ」ながらも）見受けられると言えよう。

注

- 1) 輪廻転生の思想を基礎に、「アートマン（我）」と「ブラフマン（梵）」と合一を目指す思想体系。「梵我一如」という言葉でも有名である。アートマンとブラフマンが合一することで輪廻転生から「解脱」することができる。アートマンが自分の原理、ブラフマンが宇宙の原理とも言われる。ブラフマン（brahman）とはサンスクリット語を辿れば「力」を意味する言葉にも行き着くようである。最も古いものでは紀元前800年から500年程の成立と言われる、インドの各思想の基礎となった書物のひとつであるウパニシャッド（奥義書とも訳される）に帰せられる。「己」と「宇宙」の合一という概念は、自我と他者の合一という概念も想起させる。

それは占星術でいうネプチューン（海王星）の象徴のひとつであり、重要な概念である。ルドルフ・シュタイナーは「個」と「全体」の原理に多く言及している。「個」はギリシア神話のヘラーに象徴され、「古代人」の特徴として「個」の逆、つまり「全体でひとつ」の心理的傾向をシュタイナーは論じる。社会・共同体的な意味ではなく、意識的に「集合的無意識」の存在が当たり前になっているような世界観である。「全体」はシュタイナーが言うには、ギリシア神話ではディオニュソスに象徴される。あるいはブラフマン「宇宙の真理」の探求は、何処かヘラクレイトスの言うロゴスの探求のような、ギリシア哲学的印象も受ける。

- 2) 世親は、当時のブルシャプラ、現在のバキスタン、ベシヤワールで生まれた。「唯識」の思想は仏教においては主題である「縁起」と「諸行無常」的世界観を発展、あるいはまとめたもののひとつとも言える。「縁起」は日本語では「縁起が良い」と「縁起」がほとんど同じのような使われ方をする事があるが「縁起が悪い」も「縁起が良い」も「縁起」である。ギリシア思想のダイモン（δαίμων, daemon, デーモンの語源であるが、日本では「精霊」「鬼神」などと訳される事もある）にエウ（良い）ダイモン（εὐδαίμων）とカコ（悪い）ダイモン（κακοδαίμων）があるのに似ているかもしれない。「諸行無常」もまるでニーチェの永劫回帰やあるいはショーペンハウアーの思想のようなもののように生あるものが完全なる無意味さのなかで滅び行く「厭世観」が際立っているところがあるが相対的なその本質は「実体のなさ」である。ヘラクレイトスの「同じ川に二度入ることはできない」の断片も同じだと解釈しようと思えばできてしまう。物理学のカオス理論、エントロピーの増大に似ている。「唯識」が世親において独特なのは「認識」「関係性」が「存在」であるという極端さだと言える。つまり、「認識」されることで物事ははじめて「存在している」という事。人々が言う健全な日常の生活を生きている間の常識においては「自分が見ていない世界は存在しない」なんてありえないし、それを意識して生活するのは難しい事だが、「世界5分前仮説」や「シュレーディンガーの猫」の生死を外側から観測する事と同じで根拠は一生得られない。パラドックスのようだが、実際「そうではない」と完璧に実証し否定することは難しいはずである。
- 3) ソクラテス以前のギリシア哲学というカテゴリは恐らく今の哲学史におけるデカルト以降のような神学哲学、神学からの脱却的哲学、その先の現代的思考による哲学、と哲学が道を辿るその上での「哲学、哲学者」というカテゴリと同じように考える事は難しいだろう。ピロソ피아（φιλοσοφία）という言葉はあれどもまず哲学というこの定義が曖昧な言葉が考える対象の違い、及び「哲学者」という認識が無かったと思われ

- ると、彼らの「哲学」の目的の違いであろう。起源的なピロソピア、知への愛は本来、輪廻転生と結びつき、その中で「魂」が哲学によって高められる感覚、その喜びであったのだろうと考えている。前述の梵我一如と世界観は違えど感覚の一部が共通するのではないかとも思える。
- 4) シュタイナーはアレクサンドロスの教師であったアリストテレスはその「東方の知」というギリシア哲学の伝統を引き継いだ者であり、それを教えることで、アレクサンドロスの東方遠征のきっかけのひとつとなったとも言う。シュタイナーのアリストテレスの理解の基礎にはアリストテレスには「失われた文献」が多くあるという考えがある。ローマ・中世以降のキリスト教にとっては甚だしく異端でしかないような（そしてそれゆえ消失したという）、より「古代的な発想」の文脈の文献である。
- 5) 占術に否定的なキリスト教の思想においても、東方の三博士が星によってイエス・キリストへと導かれたという事実はあまり否定しない。彼らの「星の観測」は占術ではないという考えに基づいているからだ。彼らは「天文学（アストロノミー）」と「占星術（アストロロジー）」の違いを主張する。
- 6) 海や島々を隔てた世界の各地で見られ、古い時代というテーマ、あるいは古代以降でも、主な他の国々との交流や侵略・征服などが無かった国々のあいだでも、シャーマニズムという性質が各文化に見受けられる事に対して、ふたつの解釈が出来る。ひとつ目には、実際にそれは文化として西の果てのヨーロッパ、アフリカから東の果ての南北アメリカ大陸まで移動によって伝播したのか、という解釈。そしてふたつ目には、そもそもシャーマニズム的世界観そのものがある種の人間の集会的無意識のようなものであるのか、という解釈である。
- 7) *Metamorphoses, Liber I, 776-777* 変身物語

参考文献

- Herman Diels・Walther Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Weidmann, 1951-1952
- Kurt Ranke, *Enzyklopädie des Märchens*, Walter de Gruyter Berlin/NewYork, 1977
- 「ゾロアスター教」著：青木健、講談社、2008年
- 「ルネサンスの神秘思想」著：伊藤博明、講談社、2012年
- 「変身物語（上）」著：オウイデイウス、訳：中村善也、岩波書店、1981年
- 「シャーマニズム（上）」著：エリアーデ、ミルチア、訳：堀一郎、筑摩書房、2004年
- 「シャーマニズム（下）」著：エリアーデ、ミルチア、訳：堀一郎、筑摩書

- 房、2004年
- 「ペロポディアの環—シベリア・シャーマンの智慧」著：カリティデイ、オリガ、訳：菅靖彦、角川書店、1997年
- 「ギリシア神話（上）」著：呉茂一、新潮社、1979年
- 「神々との出会い（シュタイナーコレクション4）」著：シュタイナー、ルドルフ 訳：高橋巖、筑摩書房、2003年
- 「歴史を生きる（シュタイナーコレクション6）」著：シュタイナー、ルドルフ 訳：高橋巖、筑摩書房、2004年
- 「西洋の光のなかの東洋」著：シュタイナー、ルドルフ、訳：西川隆範、水声社、1992年
- 「現代の神秘学」著：高橋巖、角川書店、1989年
- 「エッダー—古代北欧歌謡集」訳：谷口幸男、新潮社、1973年
- 「ソクラテス以前哲学者断片集」著：ディールス、ヘルマン、クライツ、ヴァルター、訳：内山勝利、岩波書店、1996-1998年
- 「ミリンダ王の問い（1）」訳：中村元、早島鏡正、平凡社、1963年
- 「性・死・快楽の起源—進化心理学からみた“私”」著：蛭川立、福村出版、1999年
- 「彼岸の時間—“意識”の人類学」著：蛭川立、春秋社、2002年
- 「エジプト神イシスとオシリスの伝説について」著：プルタルコス、訳：柳沼重剛、岩波書店、1996年
- 「ギリシア・ローマ神話—付インド・北欧神話」著：ブルフィンチ、トマス、訳：野上弥生子、岩波書店、1978年
- 「象徴哲学大系1（1）古代の密儀」著：ホール、マンリー・P、訳：大沼忠弘、人文書院、1980年
- 「象徴哲学大系2（2）秘密の博物誌」著：ホール、マンリー・P、訳：大沼忠弘、人文書院、1981年
- 「宗祖ゾロアスター」著：前田耕作、筑摩書房、2003年
- 「ポルピュリオス『ピタゴラスの生涯』—付録：黄金の詩」訳：水地宗明、晃洋書房、2007年
- 「ミリンダ王—仏教に帰依したギリシャ人（Century Books—人と思想）」著：森祖道、浪速宣明、清水書院、1998年
- 「悲しき熱帯〈2〉（中公クラシックス）」著：レヴィ＝ストロース、クロード、訳：川田順造、中央公論新社、2001年